
第2章 ベトナムと中国の国境域

柳澤雅之

第1節 国家の力、国境の力

(1)ベトナムの少数民族として生きる

❖本稿の目的

ベトナムの多数派民族であるキンの人たちと、その他の少数民族の人たちの関係は、1980年代後半以降、新たな社会的経済的統合のプロセスの中にある(第1部第2章)。本稿では、その新たな統合のプロセスの中で、モンの人たちの村を事例に、少数民族の生業体系がどのように変化してきたのかを考える。モンを事例に取り上げるのは、キンと地理的にも社会経済的にも相対的に「遠い」関係にあったからである。

ベトナムには政府に認定された54の民族がある[Uy Ban Dan Toc 2013]。ベトナムの民族別人口割合でもっとも多いのはキンあるいはベトと呼ばれる人で、全体の86%を占める。キン以外の民族が少数民族と呼ばれ、その中でもっとも人口が多いタイは19%を占め、もっとも少ないオドゥはわずか301人しかいない。本稿で対象とするモンは全体の中で8位、人口の1%を占める。多数派のキンは平地を中心にほぼ全土に分布するのに対し、少数民族は、主な居住地域が北部、中部、南部とそれぞれ分かれて住んでいる。モンは北部山地に多く、中でも西北地方に集中して居住する。

モンは18～19世紀にかけて中国南部から移住してきた。ベトナム国内のモンは、ベトナム領のちょうど最北端にあるハザン省ドンバン県からベトナム各地に移住したとされる[Vang 2008]。現在、ベトナムのモンには7つのサブグループがあると考えられている。有名なのは、衣装が明るく華やかなラオカイ省バクハーの花モンや、精緻な棚田を作るラオカイ省サパの黒モンである(写真1)。



写真1 サバ近郊の棚田を歩く黒モン女性(2010年3月)

西北地方の少数民族の中で、モンはベトナム政府とは特別の関係にあった。モンには、第1次インドシナ戦争および第2次インドシナ戦争(ベトナム戦争)で、フランス側あるいはアメリカ側のゲリラとして雇用され、ベトナム政府と戦火を交えた人が多くいた。このため戦後もベトナム政府と敵対する勢力として位置づけられ、モンと政府は緊張関係にあった。1968年、社会主義化の進行とともに焼畑が禁止され、定住政策がとられた時、蒙の多くはその政策に従わず、新たな緊張関係を生み出した。また、山地の高位部に位置することの多い蒙の村では、フランス植民地期から既にケシ栽培が普及していた。ベトナム政府によって1992年、ケシ栽培が禁止されても、高価に取引されるケシは重要な現金収入源であり、禁止政策はすぐには徹底されなかった。さらに、モンは一般に親戚や知人のつながりを大切に、そうしたつながりを通じて経済活動を行なうことが多い。そのためベトナム国内ではしばしば社会主義政策下の政府の流通政策と合致せず、国境を越えた取引が違法なものみなされることになった。ベトナム政府と蒙の人たちは、このように、政治的経済的に「遠い」関係にあった。

しかし、1990年代後半以降、他の少数民族と同様、モンもベトナムという国家に社

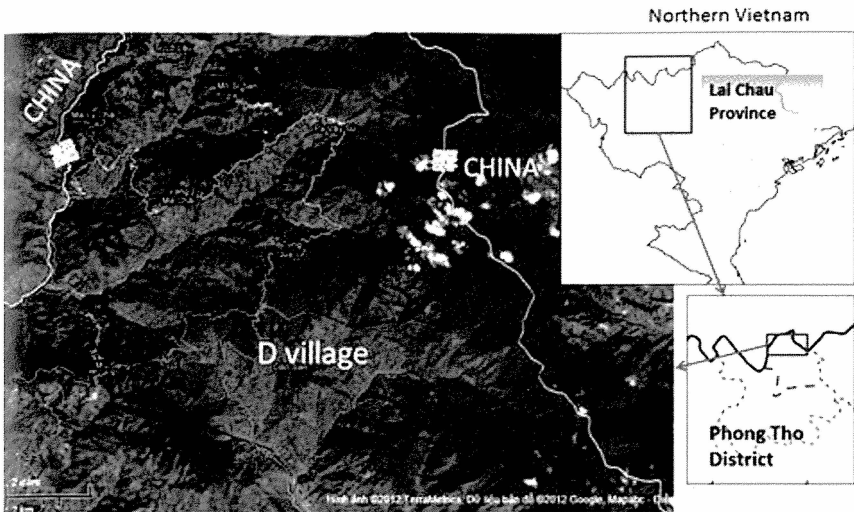


図1 調査地D村

会的経済的に統合される過程にある。本稿では、その中で、それまで親戚や知人のつながりに基づいて展開してきたモンの人たちの生業体系がどのように変化してきたのかを考える。特に2000年前後を境とした変化に焦点を当てる。ベトナムと中国の陸の国境線が確定した1999年以降、国境線をめぐる法的整備が進み、国境域のモンの暮らしは大きな影響を受けたからである。

暮らしの変化を、本稿では、生産と消費という2つの側面から検討する。生産では、食糧確保と現金収入の基盤となっている棚田での水稻生産と傾斜地での畑作物生産に焦点を当てる。消費については、村で開催される定期市で売買される品物を通じて検討する。そして、ベトナムと中国という大国のはざまに位置し、政治的経済的に大きな変動を受けながら、モンがどのように自分たちの暮らしの基盤を構築し、生きてきたのかを考える。

本稿で取り上げる内容は、2010年1月11日～21日にライチャウ省で行なった広域調査と、2012年3月12日～21日にライチャウ省D村で行なった定着調査の結果に基づいている。

❖ 村の概要

本稿では、ライチャウ省フォントー県D村に居住するモンを取り上げる(図1)。西

北地方では北西から南東にかけて山地が走り、その間を紅河やダイ川といった大河川が流れている。北部山地を二分する紅河はラオカイからハノイまでほぼ一直線に流れ、その西側に、ベトナム最高峰のファンシパン山を有するホアンリエンソン山脈が走っている。D村はこのホアンリエンソン山脈のベトナム領内のもっとも北側に位置する。中国との国境線までの最短距離は、役所のある村の中心から8.5km、村の西の境界線からはわずか2kmである。若者であれば村の中心から3時間で国境線に到着するという。

古老への聞き取りによれば、D村の成立時期は周辺村落の中ではもっとも古い。20世紀初頭にはD村を取り囲むようにして国境沿いに8ヵ村があり、7日に1度の定期市がD村で開かれていたという。

2011年現在、D村の7000人ほどの人口のうち、モンが90%を占める。ほかに、ハニー、ザオなどの少数民族のほか、ベトナムの多数派民族であるキンが暮らしている。D村のモンは、主に2つのサブグループから構成され、地元の呼称ではプアモンが全体の70%、ソー・モンが20%を占めている。

D村は15の集落から構成されている。ベトナム北部山地では一般に多数の民族が同一の行政村に共存する。しかし、1つの集落は単一の民族で構成されていることが多い。D村も例外ではなく、15集落のうち12集落がほぼモンで占められており、他にハニーで占められている2集落がある。ハニーの集落はモンの集落と接しているにもかかわらず、通婚関係は稀で、ハニーはハニーどうしで結婚することが多いという。2000年代以降は、ハニーの女性が中国側に居住するハニーや、ハニーではない中国籍の男性と結婚することが増えているという。また生業を見てみても、移住の歴史はモンのほうが古いことから、集落付近の条件の良い棚田はほぼモンが占めていて、農業生産からの収入が多いのに対し、ハニーの集落では、特に近年では中国側に出稼ぎに行く人が多くなっている。

キンが最初にD村に住み始めたのは1950年代で、役所関係の仕事に従事するために移ってきた。ただ、当時は、村に定住しているというよりは、数日D村にいて、また別の村に行く、あるいは県庁所在地に戻るといった生活パターンが多かった。キンが村の人と結婚したり、住みついて商売したりすることはほとんどなかった。一方、比較的長期間、村に住んでいたキンに軍人がいた。D村は国境に近いので、国境防衛隊の支所が1950年代に村の中心部に建設され、ベトナム各地から派遣さ



写真2 スイギユで棚田を耕起する(2012年3月)

れたキンが支所に居住するようになった。

D村の総面積はおよそ7000haであり、うち農地面積が5100ha(73%)である。農地面積のうち300ha弱が見事に造成された棚田であり、その他の4800haの農地では傾斜地での畑作が卓越する。森林は村の東部の標高が高い地域に集中し、それ以外の森林は集落周辺に残されている。D村の人びとの主要な生業活動は農業と商業である。農業では、棚田での水稲作と傾斜地の畑作物の栽培、ブタやニワトリなどの家畜飼育を行なう。商業では、周辺の森林からとれる森林産物、農産物や日用品などを商品として扱う。この他にもさまざまな活動に従事している。かつてはどの家でも栽培していたというケシは、現在ではまったく見られない。以下では、村の生産基盤とその変化を追いかけながら、国境沿いで暮らす人びとの暮らし全体がどのように変わってきたのかを見ていく。



写真3 集落内の水路。遠方に見えるのは貯水タンクとその上で遊ぶ子供たち(2012年3月)

(2) ローカルネットワークの時代—1990年代まで

❖ 棚田と水利用

ラオカイ省やハザン省、ライチャウ省などの国境沿いに暮らすモンの人びとは、一般に、見事な棚田を造成する。D村も例外ではない(写真2)。棚田は、村ができた当初から人びとの重要な生産基盤であった。

D村の形成時期は今から100年以上前にさかのぼる。中国から移ってきた第1世代は、標高が2000mにも達する高い山の中腹に年中涸れない水源を見出した。ベトナム北部山地を含む東南アジア大陸部の山地では、標高の高い山のピークに雲がかかると、山の斜面にじわじわと水が供給される。また、長いあいだ霧が晴れず、日射量が低く湿度の高い環境のもと、雲霧林が形成される。雲と雲霧林とを水源として、山の中腹には、年間を通じて、豊富な水が供給される。D村の中心地の標高はおよそ1600mであるが、ちょうど村が立地するあたりから水が湧き出している。100年以上前、D村の先祖は、この涸れない水源を生活に必要な飲用水だけでなく、

農業生産に必要な水を得るための水源として利用し始めた。水の湧く場所に村ができ、棚田が形成されたのである。

飲用水の水源は1つではない。河川から水路を引いてタンクに貯めることもあれば、地中からの湧水を使うこともある(写真3)。いずれの場合も、5～10世帯で1つの水源を利用する。そうした水源が村全体にちらばって複数存在し、それぞれの利用者が決まっている。水路やタンクは90年代になってコンクリート製になり、漏水がずいぶん減った。また、2000年代以降になると世帯の経済レベルが向上し、個人でビニールパイプを購入し共同水場から自分の家にまで直接、導水する家も出てきた。

水源の確保は基本的には早い者勝ちである。先に移住してきた者がよりよい条件の水源を手に入れることになる。しかし湧水の場合、水源のよしあしは標高とは関係がない。水は高いところから低いところに流れるので、先に移住してきた者が標高の高いところにて後から来た者が低いところにいるかという、必ずしもそうではないのである。後から来た者も水源さえ確保できればより標高の高いところに家を建てるし、先に来た人たちの水が不足しない限り水源の水を共同で利用することもできる。

おもしろいのは、このことが集落単位でも言えることにある。D村の中心地にモンの集落があり、その斜面のちょうど上にハニーの集落がある。モンが先にこの地に水源を見つけて集落を形成し、その後、ハニーがやってきた。ハニーの集落は先に来たモンの集落よりも斜面の上部にあるものの、水源はモンと見事に分かれている。ハニーの家々で使われた水の排水も、モンの居住域の水源には混ざらず、下方の棚田に流れるように設計されている。豊富な水が安定して供給されることが人びとの暮らしの基盤になっている。

棚田は、多くの場合、集落より標高の低いところに造成される。家庭の排水や家畜の糞尿を洗った水はすべて棚田に流される。生活用水は、農繁期、農閑期にかかわらずいつでも棚田へ排水される。日本の棚田では、イネを植えていない時期も棚田に水を張り、あぜ道の崩壊を防ぐ必要がある。D村でも同様に、前年の米の収穫後、高い位置の棚田から順番に導水しておく。集落内での生活用水の利用と同様、水田への導水でも、1つの水源を数枚の棚田が共有することになる。棚田では「我田引水」を常時監視することができないので、水路にきっちりとした分水装置



写真4 分水装置。写真奥の家畜小屋を経て流れてきた水がコンクリートブロックと石を使って、ちょうど二分されるようになっている(2012年3月)

が設置される(写真4)。日本には時間を区切って水の分配をする番水という慣行があるが、十分な水を確保できるD村ではそのような慣行はほとんど見られない。

❖ 棚田の形成

豊かな水に支えられて、モンは美しい棚田を造成してきた。棚田の開拓は移住当時から始められ、現在も小規模ながら続いている。

聞き取りによれば、開拓にはいくつかの波があった。最初の波は100年以上前の村の成立以前に遡る。最初の入植者である3世帯が現在の村の中心部に近いところに

棚田を開いた。現在も、もっとも灌漑水が安定して供給され、生産性の高い場所である。1つの山の斜面がほぼ1世帯の所有地となっていた。後続の入植者はそのまわりで条件の良い土地を開拓し、棚田を形成した。

開拓の第2の波は1960年代の集団農業の時代である。土地や役畜が共有される集団農業の単位となった合作社が集落ごとに設立され、棚田と焼畑の両方が集団農業の対象となった。この時期、政府のプロジェクトにより、水源の確保や水路の補修、棚田の造成が行なわれた。

第3の波は2000年代以降の個人による開田である。20世紀前半までは村の人口には多産多死の傾向があり、両親が生んだ子供7～8人のうち、成人して家庭を持つことができる子供は1～3名であることが多かった。しかし、医療施設や栄養状態が改善されたことを理由に、1970年代以降は世帯内での乳幼児死亡率が減少した。この時期に並行して家族計画が進められ、世帯あたりの出生率が低下したものの、全体的には人口増加が加速した。村全体の統計はないが、例えば開村当時から中心部に存在する3つの集落では、1979年にはおよそ200だった世帯数が、

2010年には272になっている。また1997年にはかつての3集落から66世帯が分村し、新たな集落を形成した。その結果、70年代後半以降に生まれた世代の子供たちの世代が独立する2000年代になると、両親が子供に相続させることのできる棚田の面積が減少し、新たな開田を迫られるようになった。棚田面積の拡大の要因には、こうした人口増加と土地面積の逼迫がある。さらにベトナムと中国との国際関係や経済事情の変化に起因する要因があるが、これらについては後述する。

❖ 棚田の農作業

D村の棚田は雨季の一期作である。村から棚田への通勤路は、特に農繁期には老若男女が行き交い賑やかである。村人は朝早くスイギュウとともに集落を出て、30分から1時間ほど歩いて自分の棚田に到着する。開拓当時は集落のすぐ近くに棚田があったが、現在では若い夫婦が新規に開拓した棚田ほど、遠方に位置するようになった。棚田に向かう現代の若者の服装は、特に野良着を着るわけでもなく、普段とあまり変わらない。最近では髪の毛をピンと立てておしゃれをしたまま田起こしをする若者もいる。町中にいるような服装の若い女性が片手に携帯電話を持ち画面を操作しながら棚田に向かう姿は、ここでは特に珍しい光景ではない。

モンの人の棚田における現在の主な作業暦は以下のとおりである。5月までにスイギュウと鋤を使って田起こしが行なわれる。その後すぐに馬鍬をかけて土を砕き、田面を平らにする。田植えは5月初めである。田植えは世帯単位ですることが多い。田植え後の棚田での主な作業は除草である。除草作業は通常、6月終わりから7月にかけて1回行ない、その1ヵ月後にもう1回行なう。収穫は9月である。鎌で刈り取り、束にし、稲穂の部分を板に打ち付けて脱穀する。足踏み脱穀機はほとんどの世帯が使用していない。田で脱穀した後、袋に籾を入れて家まで持ちかえり、屋根裏に保存する。

棚田に植える水稻品種は、1990年代以前はほぼすべて在来品種であった。ウルチとモチの両方があり、モチ種は主に酒の製造に使われた。1世帯に数種類的水稻品種が使われることが多く、親戚や知人を介して入手する。集団農業時代以降、ベトナム政府はベトナムで育種された水稻品種の栽培を奨励したが、高地の冷涼な気候に適した水稻品種はほとんどなかったため、D村ではベトナム的水稻品種はほとんど使われなかった。また、中国で改良育種された水稻品種も1990年代になるま

ではまったく入っていなかった。

施肥は、かつてはほぼすべての世帯で化学肥料を使用していなかったが、2000年代以降、使用する世帯が増えた。現在、7割くらいの世帯では化学肥料を使用していない。村の中で早くから人が住みつき、当初から開拓されていた2つの集落の水田では、灌漑水量が豊富で生産性が安定していることから、現在でもほとんどの世帯で化学肥料を使っていない。堆肥もほとんど入れることはない。

病害虫の防除のために、現在では農薬散布が普通に行なわれるようになった。作期の中に、通常1回、病害虫が発生しそうな場合に農薬散布を行なう。しかし1990年代前半より前にはほとんどの世帯で農薬を使用していなかった。

棚田で生産される米の収量は、ヘクタールあたり2トン程度である。D村の棚田は灌漑水に依存し、毎年、水が涸れることはほぼない。十分な水量があるため、生産量の年変動も少ないという。

米を食べる時には、庭先や道路で干してから精米し、調理する。精米の方法は、かつては足で踏んで行なっていたが、現在では精米機を使用することが多い。村に精米機が導入されたのは1990年代半ばである。それ以前では、世帯内の若い男女がその日の家族全員の食糧分の精米をするために、夕方から暗くなるころまで作業を行なっていた。

❖焼畑から常畑へ

棚田と並行して傾斜地での焼畑も盛んであった。1960年代以前の焼畑では2～3年間同じ畑地で陸稲やトウモロコシを栽培し、収量が低下してくると別の場所に移動した。条件の悪い畑地では栽培を1年のみで終了し、別の場所に移らなくてはならなかった。森林は集落内や村東部の標高の高い地域を除いて既になく、新たに畑地を開く時には直径が10cm程度の灌木のブッシュを燃やして畑地にしたという。

焼畑で植えられていた陸稲やトウモロコシはいずれも人びとの食糧として利用され、棚田での米生産を補った。品種はすべて在来のものであった。水稻と同様、親戚や知人を通じて常に優良な品種の情報を入手し、実際にそれを栽培してみて、自分の畑に適した品種を選択していた。

ベトナム政府は1960年代以降、常畑での栽培に適したキャッサバ品種の育種を進め、1980年代後半からはきわめて生産性の高いキャッサバ品種を山地部にも提

供するようになった。その結果、D村でも、傾斜地での畑作は焼畑から常畑に完全に移行した。主要な作物は、陸稲やトウモロコシから、キャッサバや飼料用のトウモロコシとなった。キャッサバはもともと家畜飼料用だったが、時に食用とされることもあった。ベトナム産品種の生産性は高く、D村で栽培されるキャッサバはほとんどがベトナム産品種であったという。

また、畑作物の1つとしてケシがかつて大規模に栽培されていた。ケシはケシ科の1年生草本で、熟す前の果実に傷をつけると乳液がにじみ出る。これを集めて加工するとアヘンとなる。通常、9月頃に植え、3月頃に収穫される。フランス植民地期から既に西北地方のモンはケシ栽培に従事していたことが知られているが、D村でもかつて大なり小なりどの世帯でもケシを栽培していた。多いところでは2～3haの畑を持つ世帯もあったという。生産物のほとんどを中国側で販売していた。2haほどの畑から乾燥重で50kgほどの製品を得ることができた。これを販売すると、1kgに対し服を1着購入することのできる現金を得ることができたという。かつての重要な現金収入源であったことがうかがえる。

❖ 定期市の開催と商品

D村はローカルな物流の拠点であった。この村では、ベトナムと中国の国境近くにある8つの村の物流の拠点として、遅くとも19世紀後半から毎週日曜日の午前中に定期市が開催されてきた。定期市にやってくるのは、地元の人たちだけではなかった。直線距離で20kmほど離れた紅河州^{ジンピン}金平県からは、漢人あるいは蒙の商人がやってきた。同じく50kmほど離れたベトナム側のタムドゥオン県からは、キンの商人がやってきた。タムドゥオン県は、1950年代後半に開拓移住政策によって、人口密度の高い紅河デルタからキンが開拓入植した県で、ライチャウ省では当時からもっともキンが多い。このタムドゥオン県のキンの商人は北部山地の他のキンのネットワークとつながっているだけでなく、デルタ部ともつながっている。したがって、D村の定期市は、大規模な取引は行なわれないものの、国境沿いの人びとの物流拠点であると同時に、中国とベトナムをつなぐ物流ネットワークの拠点の1つであったと言える。ただ、ネットワークがつながるのは定期市が開催される7日に1度のみであった。

1990年代以前の定期市で売買されていた商品は、各種農産物や調味料、日用品、衣料品など、多岐に及んだ。標高の高いD村周辺の集落からは、チンゲンサイやダ

イコンなどの野菜類、タケノコやキノコ、薬用植物などの森林産物が運び込まれた。D村より標高の低い村の人は、サトウキビやバナナ、果樹などを販売した。標高の高い村の人は標高の低い村の産物を購入するし、その逆もまた同様である。私が観察した2012年3月の定期市では、標高1000m以下に位置しターイが居住する村から運ばれてきたサトウキビがモンの人に飛ぶように売れ、小型トラックに満載されていたサトウキビがあつという間に完売になった。定期市は自然環境条件が異なる村の産物の交換の拠点であったと同時に、異なる民族の村の産物の交換の拠点でもあったことがうかがえる。

作物の種子の販売も多かった。現在の定期市でも、D村の人が卓袱台のような台に1袋が数十粒ずつ入りの種子を並べて販売しているのが見られる。自家採種した種子あるいは親戚や知人から入手した種子がある。チンゲンサイやダイコン、キュウリ、カボチャ、マメ類などの種類がある。値段は1袋1万ドン(50円)ほどである。

定期市では、加工や調理された食品も販売される。D村では納豆や食用カンナのでんぷんを原料にしたゼリーが販売される。金平県からは、麺類、手作りの餛飩やポップコーンなどが豊富に持ち込まれる。これらの食品は屋台のテーブルでそのまま食べることができ、市場に来た人の食事になるほか、同行した子供たちや若者たちのおやつにもなる。このように、農産物や森林産物、簡単な加工食品等は栽培や採集、加工に特別な資本も必要ないため、昔も今も定期市で販売される重要な商品であり、専門の商売人による販売も見られたが、多くは近隣の農家で生産された商品が持ち込まれて販売されていた。

定期市近隣の村だけでなく金平県からもたらされる商品として1990年代以前に重要であったのは、衣料品、プラスチック製の日用品、農具、塩や砂糖といった調味料だった。例えば当時からベトナム製の衣料品は定期市で販売されていたが、ベトナム側のもっとも大きな町であるフオンター県庁からD村へのアクセスは悪く、商品の価格は中国製のものよりも高かったという。さらに、ベトナム製の衣服は国営工場で製造されていたため、品質がよくなく、デザインが画一的であり、モンにとって購買意欲をそそるような商品が少なかった。衣服では、民族衣装だけでなく洋服も販売されていたが、モンの人たちの趣味に合うものは中国からもたらされた。また、鋤や鋤、鎌などの農具も金平県で生産された商品がほとんどであった。長年、モンが使い慣れた農具であるということと、ベトナム製農具よりも安いことが、中国製の



写真5 定期市での農具や調理器具の販売。商人は金平県から来た人である(2012年3月)

農具を選択する大きな要因となっていた。農具は現在に至るまで金平県で生産されたものが主流になっている(写真5)。

1990年代以前にD村で使用されていた衣料品やプラスチック製の日用品、農具、調味料をもたらしたのは、商人と一般の村人の両方であった。毎週日曜日にD村で開催される定期市に、金平県に居住するモンの商人が人力やウマを使って商品を運び、販売していた。一方、作物の種子やアクセサリー、かさばらないような小型のプラスチック製品や農具は、90年代になるまで、商品の販売を専門とする業者たちだけでなく、一般の村人によっても村にもたらされたという。そうした村人も普段は農業生産に従事しているが、10代後半になると、1人あるいは友人らと連れ立って、何度も金平県に住む親戚や知人を訪問してきた。その過程で、金平県側で日用品や道具類等さまざまな商品を入手した。彼らは村に戻ったのち、品物を知人に譲渡したり村の定期市で販売したりした経験を持っている。このように、村で利用されるほとんどの消費財は、購入あるいは譲渡を問わず、ローカルなつながりの中で金平県からもたらされたものであった。

(3)ベトナム国の一地方として—2000年代以降

❖国境管理の変化

中国とベトナムにおける領土問題は、特に陸の国境に関しては1999年に解決した。それを受けて、省レベル以下の国境ゲートが整備され、国境管理が以前より厳密になった。国境に至る道路のインフラも整備された。そもそもベトナムと中国の国境線は長大であり、国境線のすべてを管理することは不可能であった。しかし、国内の交通の要所にチェックポイントを置き、物流を定期的に検査することで、国境ゲートで正規の税関検査を経ていない商品のベトナム国内での流通が厳しく制限されることになった。

その結果、正規の手続きを経るために、特に商人は商品の運搬の負担が増大した。例えばD村の商人の場合、かつては村から西に徒歩で3時間のところに国境線を越えることのできる道が存在した。人びとはその国境を通して、さらに5kmほど北にある金平県にまで行き、定期市で販売する商品を買付け、帰りはその逆を通り、正規の輸入手続きを経ることなくフォントー県側に商品を持ち込んでいた。しかし、国境管理が厳しくなって以降、正規の国境ゲートであるマールータンを経て商品を持ち込まなくてはならなくなった。すなわち、D村から直線距離で25kmもあるマールータン国境ゲートから紅河州金水河ジュンシュイに入り、そこからさらに直線距離で22km離れた金平県にまで行かざるを得なくなったのである。また、かつてはウマか人力で商品を運搬していたが、2000年代以降、わざわざバイクや車を雇って商品を運搬するようになった。

❖国内の変化と村の変化

1990年代後半からは、ベトナム国内での経済的な変化が村の生活に大きな変化をもたらした。辺境の地の貧困削減を目的としたさまざまな開発プログラムが実施されるようになったが、ベトナム山地部の発展に特に影響が大きかったのは1998年に施行された「135プロジェクト」である[Chuong Trinh 135 2014]。これは山地部における貧困削減を目的とした国家レベルの大きなプロジェクトで、インフラ整備や生活レベルの向上をソフトとハードの両面からサポートすることを目的としていた。第1フェーズは2006年までに終了し、2006年から2010年に第2フェーズ、2011年から2015年

表1 衛星画像の解析によるD村の土地利用の変化

	1992		2006	
	ha	%	ha	%
森林	3,037	43	2,380	34
ブッシュ	2,335	33	1,517	22
草地	658	9	989	14
畑地	926	13	1,885	27
棚田	90	1	276	4

出典：1992年と2006年のランドサット画像の解析による(原表作成はダミオンチュオン氏)

まで第3フェーズが実施されている。このプロジェクトにより、ソフト面では、水稻や畑作物の改良品種の紹介や導入、栽培技術の指導が行なわれ、フォントー県の農業普及員の往来が頻繁になった。ハード面では、フォントー県の県庁所在地からD村に続く幹線道路が1998年から整備された。この道はかつてはダートであったが、2003年にはアスファルト舗装が完成し、同時に道幅が拡張された。2002年には電線網が村に到達し、2012年までに15の集落のうち中心部から遠い4集落を除いて恒常的に電気が利用できるようになった。村の中の水路の改修が進み、2010年にはほとんどすべての水路をセメントで補強することができた。その他、村にある4つの小中学校や医療施設、市場などの公共施設についても大規模な改修工事が行なわれた。村の中の生活基盤は目に見えて改善した。

ベトナムと中国の双方の国レベルでの経済力が向上したこの時期、D村の経済レベルも向上した。かつて重要な換金作物であったケシは90年代前半までに姿を消し、これに代わって人びとはさまざまな現金収入源を獲得した。特に農産物や畜産物、森林産物の中国側での需要が大きくなった。飼料用作物としてトウモロコシやキャッサバの改良品種が導入され、換金作物として栽培されるようになった。ニワトリやブタを飼育する世帯が増加した。また中国で薬用植物として需要が高いカルダモンの生産が開始された。以下では、D村の生業体系の変化を詳しく見ていこう。

❖ 棚田の拡大と米生産の増大

既に述べたように、D村の棚田の拡大には3つの波があった。もっとも近年の波は2000年代以降の拡大であった。表1に、1992年と2006年のD村における土地利用の変化を示した。1992年と2006年のランドサット画像を用い、森林、ブッシュ、

草地、畑地、棚田の5種類に分類し、それぞれの面積を算出したものである。これによると、棚田面積は1992年に村全体で90haであったが、2006年には276haへと、およそ3倍に拡大したことがわかる。棚田を新たに造成できるかどうかは水源が確保できるかどうかにかかっているが、新たな水源を見つけることはほぼ困難である。このため、既存の棚田の下方の傾斜面を平らにして、1段ずつ棚田の造成が進んだ。この時期の棚田の拡大は世帯単位で行なわれた。2003年には政府の貧困削減プログラムの一環として、棚田造成のための補助金が出され、村全体で30haの棚田が新規に造成された。

棚田面積の拡大により、相対的に住居から棚田までの距離が遠くなった。両親から十分な面積の棚田を相続できなかった若い世帯は新たに棚田を造成したため、棚田の位置がより遠方になったのである。そのため、多くの人たちが農作業に行くのにバイクを利用するようになった。

移動や運搬の手段はかつてはウマか人力であった。そのため、どの家にも1頭以上のウマが飼育されていた。しかし、道路事情が改善した2003年頃を境にウマがバイクに転換された。現在では90%以上の世帯でバイクが利用されている。棚田や畑地に行くにもベトナム側の町に行くにも、人びとの暮らしにとってバイクは欠かせないものとなった。

棚田面積の面的拡大と同時に単位面積あたりの水稲の生産量は増加した。D村にもたらされるベトナムの水稲品種は、かつては生産性も品質もよくなかったが、90年代以降に改善され、多くの世帯が利用するようになっていた。これに対して、1994年頃からようやく中国の改良品種がもたらされた。当初は生産性も品質も低いものであったが、2003年頃からベトナムの水稲品種よりも生産性の高い品種が出回るようになった。そのため、2003年以降、中国の改良品種を使う農家が急増した。また、化学肥料や農薬を使用する世帯が増加した。村の公式の報告書では2011年の水稲の平均収量は4トン/haと推定されている。

2000年以降、D村の人口が増加すると同時に、棚田面積も拡大した。その結果、D村の人たちはどの程度、自家消費用の米を生産し、食糧として利用するようになったのだろうか。2011年の人口7016人、2012年の水田面積287haをもとに計算すると、1人あたりの水田面積は409㎡となる。これに2011年の村の水稲の平均収量4t/haを乗じると、1人あたりの米生産量は164kgとなる。この数値をどのように理

解すればよいだろうか。ベトナムで年間に消費する米の量を、1人あたり¹ 183kgだと推定すると、年間に必要な米の量の9割近い米を自分たちの棚田で生産していることになる。残りの食糧は、畑作で得られるトウモロコシやキャッサバ、あるいは現金で購入して入手すると考えられる。また、D村の人がD村の領域の中だけでなく、隣村にも棚田を有していることがわかっている。棚田で栽培される米はD村の人たちの年間消費量のかなりの部分を賄っていると考えるのが妥当である。このことは、聞き取りで、2000年代以降、自家消費のほとんどを栽培することができるようになったという証言とも整合性がある。

❖ 換金作物栽培の増大

畑作物の中で重要なのが、陸稲、トウモロコシ、キャッサバである。村長が推定した2011年の作物ごとの栽培面積は、陸稲50ha、トウモロコシ290ha、キャッサバ1000haである。いずれも傾斜地の常畑で栽培される。この他に畑作物としては、ダイズ、ラッカセイ、野菜、果樹類が栽培されるが、これらは主に自家消費用である。

表1には、1992年から2006年にかけて村の畑作物の栽培面積が大幅に増加したことが示されている。D村全体の畑作面積(畑地)は1992年に926haであったが、2006年には1885haと倍増している。これは、トウモロコシとキャッサバのいずれもが、自分たちが飼育する家畜に飼料として与える量が増えたというよりも、むしろ、ベトナム国内や中国側での家畜飼料の需要の高まりを受けて換金作物としての価値が高まったことが大きい。トウモロコシは収穫後、乾燥させてベトナム国内で販売する。キャッサバはチップ状に切って乾燥させたのち中国側に販売する。販売先はベトナムと中国に分かれているが、トウモロコシの種子とキャッサバの苗はいずれもベトナムのものを用いている。トウモロコシはLVN10という品種が有力である。この品種はラオスのポンサーリー県やホアパン県に居住するモンにも普及している。また、キャッサバでは、1980年代後半からベトナムと国際機関とが共同して育種した結果、高収量品種が育成された。これは、D村でかなり普及するようになった。

すなわち、トウモロコシとキャッサバの栽培面積の増大は、かつて自家消費用に栽培していた畑作物が農家世帯の重要な換金作物となることによって、かつてモン

1 例えば、ヤングらによると、ベトナム人の年間摂取カロリーを米換算すると精米で147kgになる[Young et al. 2002]。籾重量の8割が精米での重さだと仮定すると183kgになる。

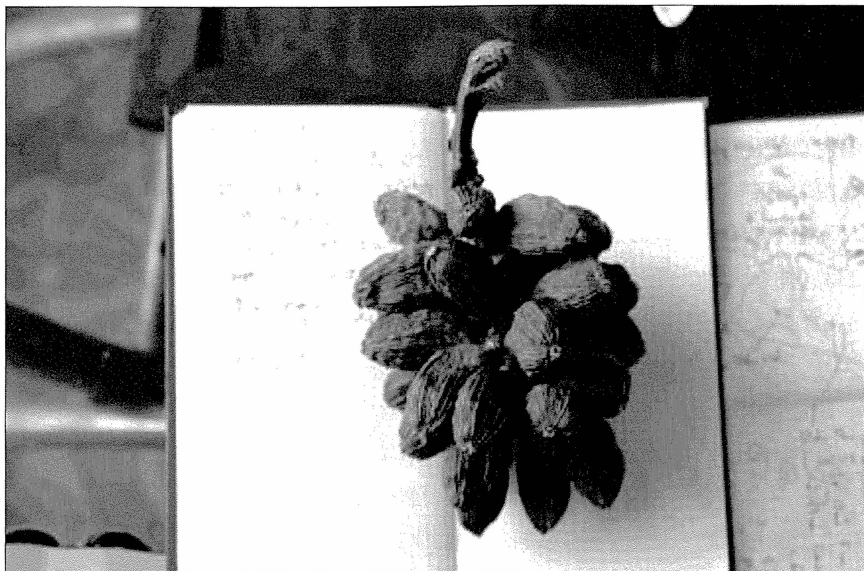


写真6 乾燥させたカルダモンの果実(2012年3月)



写真7 カルダモンが栽培される森林。この樹木の下にカルダモンが生育する。写真に見える小屋で、カルダモンの果実を乾燥させる(2012年3月)

の間で閉じていたローカルな生産と流通がベトナムと中国の双方に大きく開かれるようになったことを意味する。

❖森林産物の販売

現金収入源の中で2000年代以降に急拡大しているのが、カルダモンの栽培である(写真6・7)。カルダモン(*Amomum aromaticum*)はショウガ科の植物で、インドからマレー半島に広く分布する。種子を植えてから4年目以降に収穫が可能で、果実が薬用や香辛料として利用される[堀田1989]。カルダモンは林床で生育することが多い。ファンシパン山近くにあるホアンリエンソン保護区では、大木が鬱蒼と茂る森林の中でカルダモンが見られた。栽培の際には被陰樹を必要とし、ライチャウ省では一般に森林の中で栽培されることが多い。昔からD村には野生のカルダモンが分布していたという。しかし、2001年から販売用の栽培が増加した。乾燥した果実の販売価格は、2001年が8000ドン/kgであったのに対し、2011年には20万ドン/kgにまで上昇した。金平県に居住するモンの商人がこの村にまでやってきて、乾燥した果実を購入するようになった。販売価格が上がるにつれてD村でも栽培する人が急増した。

D村の森林は東部の高標高地帯か集落の近傍にしかない。そのため、D村の人は隣村の森林の中でカルダモンを栽培している。モンの慣習では、材木を利用する以外は森林はオープンアクセスである。したがって、隣村の領域内であってもD村の人がその森林の中でカルダモンを栽培することは可能だと言う。そのため、2001年以降、D村の人が隣村の森林をカルダモン栽培に利用するようになった。

❖定期市の商品

1990年代までの定期市ではさまざまな農産物や消費材が販売されていた。民族間での商品の交換や栽培環境の異なる作物の交換が見られた。モンのローカルなネットワークを通じて金平県からもたらされる商品もあった。しかし、2000年代以降、D村の人の現金収入源が拡大し、経済状態が改善するようになった結果、定期市のありかたや村人の消費生活に変化が見られるようになってきた。

かつての定期市と同様、現在でも、農産物や衣料品、プラスチック類が市場での主要な商品である。しかし、村人はかつてほど中国製の商品に依存した生活を送

るわけではなくなった。特に顕著なのが、ベトナム製の衣服やプラスチック製の日用品、バイク、携帯電話の流入である。2000年代以降、そのほとんどをベトナム製の商品が占めるようになってきた。

D村への道がアスファルト舗装される以前、村への往来は主に徒歩に頼らざるを得なかった。したがって、フォントー県の役人が仕事で村を訪れる場合、あるいは村の幹部が県に出向く場合、徒歩で半日ほどをかけて県庁と村の間を往来しなければならなかった。また、ウマカ人力で商品を運搬していたため、商品の輸送も頻繁に行なわれているわけではなく、週1回開催される定期市は村人にとって生活に必要な物資を入手する重要な機会であった。

しかし、交通インフラが整備され、村人の経済事情が好転するようになると、フォントー県を含めて、ライチャウ省内の町から村に運ばれる商品が増大した。また、2000年代半ばから、村に住みついて商売をするキンの人数が増加した。キンの商人たちは先に来ていた親戚を頼って村に移り、主に村の中心の道路沿いに居住するようになった。現在、村に居住するキンのほとんどが商業に従事している。キンは、デルタのフンイエン省やハノイに近いフート省、あるいはライチャウ省の町から衣服やプラスチック製の日用品を持ち込み、小売店を開いて販売するようになった。こうした品物は、日常的に必要なものである。そのため、D村のモンは、7日ごとの定期市をわざわざ待つのではなく、キンの商店から品物を購入するようになった。

販売が特に拡大している商品は、携帯電話とバイクである(写真8)。携帯電話はすべてベトナム製であり、どんなに機能がシンプルで安いものでも本体が1台100万ドン(5000円)はする。使用料を継続して支払う必要もある。このような高価な商品だが、現在、D村のほぼ全世帯が最低1台は携帯電話を所有している。携帯電話の電波を受ける塔が2010年に完成し、携帯電話会社2社の通話が村の広範囲で可能になった。しかし、村の人が携帯電話を持ちだしたのは、電波塔が建設される前の2004年のことであった。やがて電波塔が建設されることを見越して、多くの人が携帯電話を買い求めた。当時、大部分の人は、音楽を聴いたり、写真を撮ったりする目的で、携帯電話を持った。

また、バイクの普及の速度もすさまじい。新車のバイクは携帯電話よりはるかに高価で、2000万ドン(10万円)になることもある。2000年代の半ば過ぎには、いずれもD村のほぼ全世帯で所有されるようになった。道路がアスファルト舗装された頃



写真8 キンの商人による携帯電話とバイクの販売(2012年3月)

から、特にベトナムで一般に販売されているバイクが村で普及するようになった。バイクはベトナム国内で運転するのが前提であり、ベトナムに輸入されたかベトナムで組み立てられたバイクを購入しなくてはならない。一般にベトナムでは、警察による取り締まり時に運転免許の有無よりもバイクの登録証をチェックされることが多い。現在のD村でバイク販売を手掛けるのはキンだけである。D村のモンにとってバイクは、農業をするにも移動をするにも必要不可欠な存在となっている。

(4)生産と消費に見るベトナムと中国

これまで述べてきたD村の変化をまとめてみよう。

1990年代後半から2000年代にかけてD村の蒙の生活は大きく変化した。ベトナム国内のさまざまな開発プロジェクトの恩恵を受けて村の生活環境が改善すると同時に、ベトナムと中国の経済発展の影響を受けて世帯レベルでの経済状態も改善した。その結果、蒙の生活に占める中国とベトナムの割合に大きな変化が見られた。このことを、D村の生産と消費とに分けて見る。

1990年代以前のD村のモンの衣食住のほとんどは、中国製品や中国の市場に依存していた。食糧の生産は村の棚田と畑地で行なわれ、そのほとんどすべてが自家消費用であった。水稻やトウモロコシ、キャッサバなどの種子や苗は、自家採種あるいは、主に金平県に住む親戚や知人を通じて入手していた。すなわち、D村のモンの生産と消費はほとんどを中国側に居住するモンのネットワークに依存していた。

しかし2000年代以降、ベトナムの制度的なかかわりが増加し、生産と消費における中国への依存の度合いが減少した。例えば生産面では、貧困削減プログラム等を通じ、交通インフラが整備され、地方政府の役人や農業普及員の往来が頻繁になった。その結果、ベトナムで育種された水稻やトウモロコシ、キャッサバの新品種へのアクセスが容易になった。また、棚田の造成もベトナム政府の補助を受けて行なわれた。

一方、金平県につながるモンの親戚や友人を介したネットワークもまた消滅したわけではなかった。2000年代以降のトウモロコシやキャッサバは、中国向けの飼料作物として栽培された。カルダモン栽培の増加は、金平県での購入価格が増加したためであった。カルダモンは金平県で集められた後、雲南省の省都である昆明市をはじめ、中国各地の都市に運ばれるという。その他、農作業に必要な鋤や鍬、鎌などの農具は、依然として金平県のモンの人たちのネットワークを通じてD村にもたらされていたし、多種多様な野菜類や果樹の種子や苗も同様であった。すなわち、ベトナムとの制度的なかかわりが増大したものの、かつてのような、金平県に居住するモンの人たちの親戚や友人を介したネットワークがこれに代替したわけではない。従来のネットワークに加えて、規制や法律の遵守といった約束事が増えたという点では面倒ではある。だが、ベトナム側の制度的なかかわりの増大は、D村のモンの人にとって、生産活動のための選択肢が増えたことを意味する。

次に、消費について検討する。1990年代以前のD村では、衣料製品やプラスチック類、調味料など、定期市で販売される商品のほぼすべてがモンのネットワークを通じてもたらされていた。商人であるか否かを問わず、D村の人は金平県側の親戚や知人を訪問し、その帰途に多様な商品をD村にもたらした。ベトナム側からもたらされた消費財は、モンにはほとんど普及していなかった。その理由は、単に距離が近いからではなかった。金平県で得られる商品のほうが、品質もよく、価格も安かったからである。

しかし、2000年代以降、D村の消費生活に変化が起きた。もっとも顕著な変化が携帯電話とバイクの普及であった。これらを販売しているのは2000年代以降急激に増えたキンであった。キンの商人は、古い人は70年代から居住しているが、90年代後半から徐々に増え、先に移住してきた人が親戚縁者を呼び寄せる形で、特に2000年代以降、増加した。その結果、バイク新車販売店は1軒だが、携帯電話は5～6軒の店で販売している。

そして、こうしたキンの商品の増加の背景として、ベトナム側の社会的制度的なインフラの整備があったことを忘れてはならない。携帯電話が使えるようになるには、ベトナム国内での通話が可能となるように、電波塔の建設や課金のシステムの確立が不可欠である。バイクについても、ベトナム国内で運転するには、正式な登録証の発行が必要である。ベトナム国内の社会経済的インフラが整備されたのであれば、そのサービスを楽しむには、ベトナム国内の制度に従う方がメリットは大きい。D村の人がこのような判断を下したことを、携帯電話とバイクの普及は示している。

(5)おわりに

本稿では、ベトナムと中国の国境域にあるライチャウ省フォントー県D村を事例に、両国の政治経済的な変動の中で、モンがどのように暮らしの基盤を構築し、生きてきたのかを取り上げた。特に2000年頃の大きな変化を軸に、生産と消費の両面から検討してきた。

D村は、地理的にも政治経済的にもベトナムの中心からはるか辺境に位置する。それにもかかわらず、ベトナムの国内的な社会経済的制度が辺境にまで急速に浸透していることをD村の事例は示している。中でも棚田の造成や水稻品種に関する情報の増加は、モンの食糧生産基盤に対するベトナムの制度的かかわりが増大したことを意味する。また、バイクや携帯電話の普及は、ベトナム側の運輸や通信にかかわるインフラ整備が辺境にまで及んだことを意味する。モンの生活世界のいくつかの重要な基盤がベトナム国内の制度に組み込まれ、そのサービスをモンも享受できるようになった。また、親戚や知人を介したモンのネットワークもまた有効であり、金平県側のモノや情報を村にもたらしてくれている。ベトナムと中国の国境域では、モンのネットワークを活用しつつベトナムの社会経済に統合される生業世界が始

まったと言える。

【引用文献】

Chuong Trinh 135 <http://ct135.ubdt.gov.vn/>

堀田満編 . 1989. 『世界有用植物事典』平凡社

Uy Ban Dan Toc. 2013. <http://ubdt.gov.vn/wps/portal/ubdt/home>

Vang, S.T. 2008 . “The Hmong of Southeast Asia: A History of the Hmong: From ancient times to the modern diaspora” Lulu.Com.

Young, Kenneth B., Wailes, E.J., Cramer, G.L., and Nguyen Tri Khiem. 2002. *Vietnam's rice economy: Developments and prospects, Research Report 968*, Fayetteville University of Arkansas.

第2節 商品経済の浸透と棚田の農業

第2部第2章第1節では、ベトナムと中国の国境域に居住するモンの生活世界の変化を検討した。具体的には、フォントー県D村を事例に、生産面では棚田と傾斜地での農業生産、消費面では、定期市で売買される商品をもたらした主体を歴史的に概観し、2000年代以降、モンの生活世界が、モンのネットワークに加えて、ベトナムの国家の制度により深くかわりながら構築されていることを明らかにした。しかし、これは、国境域のベトナム側の事情を検討したに過ぎない。では、国境の向こう側、すなわち金平県側の人たちの生活世界はいかなるものだろうか。本稿では、中国、金平県側の少数民族の生活世界を文献に依拠して補足的に説明し、ベトナム側の視点からその変化を検討する。

❖ 金平県の少数民族

ライチャウ省フォントー県と国境を挟んだ中国側の行政区分は、雲南省紅河哈尼族彝族自治州の金平苗族瑶族傣族自治县(以下金平県)である。金平県は2008年の人口36万人のうち少数民族が31万人(86%)を占め、うち、ベトナムのハニーに相当する哈尼が9万5000人(26%)、モンに相当する苗が9万1000人(25%)を占める[雲南省紅河哈尼族彝族自治州2014]。西北地方と同様、少数民族が多数居住する地域である。

地形は、急峻な山地に特徴がある。特に金平県は哀牢山^{アイライシヤンディ}地の南部に位置し、ベトナムのホアンリエンソン山脈につながる急峻な山地に位置する。そのため、金平県の少数民族の村は、D村と同様、棚田の水稻作や山地斜面の畑作が重要な生業基盤となっている。哀牢山地の南部の村で土地利用と農業技術の調査を行なった安達によると、標高800～1800mは棚田の集中する地帯であり、また哀牢山地南部でもっとも人口密度の高いところである[安達2003]。さらに、昔から定期市が開かれ、地域の中心として発展してきた街は、ほとんどがこの標高帯に分布する。以下では、安達[2003、2012]と、金平県で棚田や定期市の詳細な調査を行なった西谷[2005a、2005b、2006、2007、2008]に依拠し、金平県での農業生産と定期市の概要を述べる。

表1 金平県における6ヵ村の生業体系の比較

主要民族	標高(m)	棚田 (水稲)	傾斜地利用	生業基盤
傣	500～800	二期作	パラゴムノキ	棚田の水稲作が中心。 2004年から棚田がバナナ畑に転換。
哈尼	500～1000	二期作	キャッサバ、パラゴムノキ、レモングラス	棚田の水稲作が中心。 90年代後半からレモングラス、2004年から棚田がバナナ畑に転換。
哈尼	600～1300	一期作	キャッサバ、レモングラス、トウモロコシ	棚田より畑作地が卓越。 特にキャッサバ面積が大きい。
阿魯	600～1300	一期作	トウモロコシ、キャッサバ、レモングラスの他にも、多数の野菜・果樹類	棚田より畑作地が卓越。 野菜類の販売が重要な現金収入源。
揺	800～2000	一期作	畑地はほとんどない	森林で採取する草果(ショウガ科)の販売
古聰	1000～2000	一期作(1999年以降)	90年代まで焼畑と狩猟	草果の販売と小規模交易

出典：西谷[2005a、2005b、2006、2007、2008]を基に作成

❖農業生産

金平県のベトナムとの国境に近い少数民族居住地では棚田が卓越し、斜面の畑作と組み合わせた生業体系が構築されている。標高800mあたりを境として、それより標高の低いところでは水稲の二期作、標高の高いところでは水稲の一期作が行なわれる。棚田の水源は、湧水のこともあれば、小川のこともある。水量も、棚田生産に十分な村と、そうでない村とがある。生態的な環境条件に応じて、村ごとに多様な棚田の維持管理と水稲生産が行なわれている。

金平県で6ヵ村の比較調査を行なった西谷の調査結果をまとめると表1のようになる。

標高が低いほど棚田の水稲生産に特化し、標高が高くなるほど畑作あるいは林産物に依存する度合いが高くなっているのがわかる。

西谷は6ヵ村の歴史的な生業体系の変化についても述べている。それによると、2004年を画期として、6つの村で変化が見られるという。

低地の傣の村では、1986年から傾斜地でワタやキャッサバに代わってパラゴムノ

キの導入が開始された。2004年からは水田がバナナ業者に賃貸されるようになり、村人が自ら稲作を行なうのではなく、日雇いとしてバナナの栽培と管理を行なうようになった。豊富な土地と水を背景に、一部の農業生産が放棄された。

哈尼の村は2村あり、標高の低い村では傣の村と同様、水田の一部がバナナ栽培に転換したり、傾斜地でパラゴムノキが導入されたりした。

一方、標高の高い村では、そもそも棚田面積は少なかったものの、1990年代半ばからハイブリッド種が植えられるようになり、米の自給が可能となった。棚田よりも畑作地が卓越し、特にキャッサバの栽培面積が大きい。90年代半ばからレモングラスなどの換金作物が盛んに栽培されるようになった。

^{アールー}阿魯の村では標高の高い哈尼の村よりもさらに棚田面積が少なく、90年代にハイブリッド品種が導入されて以降も米の自給は達成できていない。棚田よりも畑作地が卓越し、1980年代からトウモロコシ、キャッサバ、レモングラスなどの換金作物が多数栽培されている。哈尼の村と異なるのは、定期市で販売するための野菜類の栽培が非常に多く、主な現金収入源となっている点である。

^{クーツオン}古聰の村では、1990年代まで焼畑が行なわれ、棚田面積は狭小であった。焼畑生産の不安定性を補うため、森林産物の採集が行なわれ、定期市で販売していた。

このように、村の立地条件に応じて生業戦略が異なり、換金作物の種類も異なる。農産物や林産物の交換などを通じて、村ごとに補完しあう関係が見て取れるという。そして、村ごとの商品の交換が行なわれたのが定期市であった。

❖ 定期市

金平県では6日または4日ごとに定期市が開催される。西谷が調査した金平県の^{ジャーミーラフズー}者米拉祜族郷と^{ラオジージャイ}老集寨郷における街道沿いの6つの村落で1日ごとに順番で定期市が開催され、6日後に最初の村に戻っていた。それぞれの市場は車の利用が可能な公道周辺の村からおよそ20km圏内に位置し、徒歩あるいはバイクで到達することができ、市場までかかる所要時間は片道3～4時間以内にあるという。

定期市で商品を売買するのは、周辺の村に居住する少数民族と専門の行商人である。村在住の人たちが村で栽培された野菜や果樹などを販売するのは、D村と同様である。また、販売を専門とする行商人は漢人が多いようである。

定期市で売買される商品は、雑貨や衣料品、靴などの生活用品、野菜、魚、肉

などの食品類、酒タバコ等の嗜好品、生きた家畜などであった。西谷が調査した市場の商品のリストの中にベトナムからもたらされたとはっきりわかる商品は、塩を除きほとんど見られない。商品は圧倒的に中国製品に依存している。

また、西谷が調査したある定期市では、売買されていた321種の商品のうち、1店ないし2店でしか販売されていない商品が半数以上を占めるという。すなわち、売買される商品は商人によってなるべく重ならないような工夫がなされていることを示している。販売する人にとっては同業他社との競合が少なく、購入する人にとっては多種多様な商品を手に入れるという経済的なメリットがあるとも言えるが、儲けよりもむしろ定期市は日常生活に必要な最小限の物資を商人と村人が共同で提供するための交換の場であるとも言える。

❖おわりに

金平県の少数民族による農業生産と定期市の簡単な素描から、ベトナム、フォントー県D村との類似点と相違点が見て取れる。

まず類似点は、金平県も少数民族が卓越し、村ごとに異なる生態環境条件に応じた生業体系が見られることである。低地での豊富な水を利用した水稻二期作と高地での畑作との組み合わせで、生業が成り立っている。また、定期市は日常的な消費を支える重要な機能を持っていた。

一方、相違点は、商品経済の浸透や国家の制度とのかかわり方である。金平県の哈尼の2つの村のうち、標高の高い方の村と阿魯の村はD村と標高も同程度であり、棚田と畑作に依存しているという農業生産面でも類似点がある。しかし、金平県側の2つの村は1980年代に既に中国で販売可能な飼料用トウモロコシやキャッサバの栽培が普及していたようである。90年代にはレモングラスなどの新しい換金作物が畑作地で栽培され、特に阿魯の村では非常に多くの野菜類が販売用に栽培されている。D村に比べて、商品経済の浸透が10年ほど早い。

定期市を見ると、漢人と少数民族の人たちのかかわりが、D村におけるキンとモンのかかわりとは異なることがわかる。金平県の定期市では漢人の商人の割合が高く、漢人の商人がもたらす商品は特定の商品に限られていない。漢人のもたらす商品は少数民族の生活世界に浸透している。

中国とベトナムの国境域に位置する金平県とD村の少数民族は、中国やベトナム

ムという国家制度とのかかわりを深めつつ、自分たちのネットワークも利用しながら、生活世界を構築しているという点では一致している。しかし、D村から見た場合、金平県側の少数民族の生活世界は既に中国という経済大国の中の暮らしである。金平県によく出稼ぎに行くD村の哈尼のある若者は、金平県は2000年頃からビルが多く建ち並ぶ近代的な都市で、ベトナムの首都ハノイより大きいと言う。この若者はハノイに行ったことはないが、そうしたイメージが構築される背景には、中国との制度的なかかわりが金平県側の生活世界にとって大変重要であることを示していると考えられる。

【引用文献】

- 安達真平. 2003. 「雲南省哀牢山地南部イ族村の棚田農業システムに見る土地利用と技術」 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士予備論文.
- . 2012. 「雲南省哀牢山地の多民族棚田地域における灌漑システム」 ヒマラヤ学誌 (13) 341-353.
- 雲南省紅河哈尼族彝族自治州. 2014. <http://www.hh.gov.cn/info/1021/26555.htm>.
- 西谷大. 2005a. 「雲南国境地帯の定期市——市の構造とその地域社会に与える影響」 『東京大学東洋文化研究所記要』147: 340(83)-307(116).
- . 2005b. 「市のたつ街——交易からみた多民族の交流」 『国立歴史民俗博物館研究報告』121. 339-400.
- . 2006. 「雲南国境地帯の棚田——アールー族とヤオ族の灌漑システム」 『国立歴史民俗博物館研究報告』125: 259-280.
- . 2007. 「市の誕生と都市化——生業経済の定期市から市場経済の市へ」 『国立歴史民俗博物館研究報告』136: 267-328.
- . 2008. 「土地利用と斜面畑からみた水田稲作の多様性」 『国立歴史民俗博物館研究報告』139: 53-98.